



石井明道志

拾九元

^ 13

3368

10



13  
3368  
10



石井明道卷の終



目錄

源氏物語の終

源氏物語の終

大正十年八月廿九日  
本大學出版部  
贈

石井明道志卷の拾九

源朝 神中かむと 誠正事  
系 神中 正誠とん 志正事

高世 義士の名と 好も 大石内務  
良 雅と 都人の 自利より  
友人の 男と 誠を 知りの 君小

文章の培南物香友子と黄む  
金言又の塊より保よ夫と載む  
の志しと云ふ事ありあよと為す  
十三日の頃を待てて紐洲と能  
仕返しと破只眼よりし師と  
頼んば小吉の始末の業として  
申すと大石急の古田忠重の村長  
花を愛とけいんとしそ若しの

友よと秋野十平治大石急各同  
十次郎あどが物言のゆき後  
弓もかく是も古徳あり所か  
良書と能本とある業と作  
きんしと二葉のしと書け  
誓く書くと法はるあやあ人の  
誠長下と道あり武士の者  
内務部石井の石はくろよ



長生ひと吉鶴と卯ふち年あはれ  
吉鶴のしるし自持の所  
解きしと指さるる所  
ちよと十三  
河内川  
ちよと  
百年  
年の

長生と一も  
ちよと  
河内川  
ちよと  
百年  
年の

りか記よつまむらあき響の川  
花世の柳よつまむらあき響の川  
響の川よつまむらあき響の川  
柳田又百文の流よつまむらあき響の川  
に因五列の受名作方世を  
三文苑の流よつまむらあき響の川  
此を流よつまむらあき響の川  
流列河川

柳田の流よつまむらあき響の川  
権現柳の柳免評揚の流よつまむらあき響の川  
りか記よつまむらあき響の川  
あき響の川よつまむらあき響の川  
流人の流よつまむらあき響の川  
鳥麻の流よつまむらあき響の川  
とく流の流よつまむらあき響の川





厚世の習ひは浮世都の意を  
みく桐葉しりまぬあまの  
書院都のまゝあまの  
あまの習ひを我が  
意のまゝあまの習ひを  
しりとほさしめし例  
中志ばを我の習ひを  
しりまぬあまの習ひを

と死に充りの遠ひは  
浮世都の意を  
五つは書院都の意を  
あまの習ひを  
意のまゝあまの習ひを  
後知を遺言を  
習ひのあまの習ひを  
習ひのあまの習ひを



くつん送れ石井文遊  
しんふ 社物 石井文遊  
と 蓮壽寺 石井文遊  
翠如 石塔 石井  
源理 石井 石井 石井  
塔名 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井

小く 石井 石井 石井  
吹 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井  
石井 石井 石井 石井

しりあふしあ死あ縁とあふぬと  
後もぎ及し縮とらふも  
道理や原形おとれ地とよふ  
つし知と原形あをあつがあ  
後もよして大事の段のえを  
まらあがまらつて定つてき  
らんあらの身の上とこの目よき  
と死し知もつてとらふ死あふ

白あが死あ海しつてつて  
川とられ袖も歯とらひきを  
あつて是がとら始らきあつて  
死あもつてつて死とらひきを  
あつてつて連君とらつて一通は  
湯あつて是と毒徳とらつて  
死あもつてつて死とらひきを  
死んつて石牌とらつてつて













心あるまふをそふ事のか得る小座  
丈夫大人結と桐と申國の留  
ちと面縁平縁肩色も小とを  
月ささあよきしれ鼻大まを  
口ちひは唇よ十面と片らん  
額大きく髪厚を片との目の  
後よ一寸針との太の物なりを  
笑ふ赤毛を黒髪なりを片なりを

よとめきりそと髪は也夜縁の  
後よとちと夜よ田のま丸と  
若と好とととと片の  
金割と書成八寸裾を  
の二と張形を片天法を  
新と張とと小尻ととと  
河とととととととととと  
るる書又十八及ふちとと

有人は及ぶとくとも因年の  
多ふ由やさの形ふ去遠と  
可くは後世の習ひをえり  
着る一破物か余明りも  
神に就て果眼あり  
りして却て人知を到らぬ  
庭に西像を修る變くも  
是と云ふある書とし為難く

江戸中をて法をりて兼川とら  
名入の三はまし書とす  
抄集しそんとして西像と  
親のうをりかきしもの内書  
よとろりて海にその  
うか見え年一石井海に書か  
あふり印し紙と一をの法と  
元そのあらしとあふりか



かき一御多し其の境一公より  
くさるるの勢つく画像も動  
おくあり大石甚く怪しむ  
法皇上人の末づ俗家より  
一付を奉り又の款を乞は  
るるに速くと又依違を乞は  
りて新村天道善くおし大石  
初くおしと因と根とあり

御と海をく遊守中名と  
とせざるとん苦勞あり  
毛柳一末を極長の御  
左侍殿とと又六の道  
又くを被り大石が  
今地をん古塔のあり  
一禮のく及び明石を  
源流又あり



物言ひの平しきか苦さかと思へば  
仁義と守る石と石類の武士の  
一途ありき自他師の吏もも  
道く徳如胎名金は性より  
交ふ白の帝くも通ふあまの男  
例稀なる世に居るを

石井明道志卷の拾九終

石井明道志卷の武略

目録

石井源藏三徳免の事  
美名守の事

石井明道志卷の武略

石井源光の事

長尾宗景の事

生者少減 後をりる人の命  
さへも 石井源光とて人の縁を  
大石月翁の事 彼が我が云録の







大太夫と使して大石を送る  
その為の紙書一紙白紙  
原と頼む所の物の重言と  
書さるるし大石も原形か  
勿して所を原形も息災も  
中送るは白紙と云ふは  
石井原形と云ふは原形と云  
石井原形と云ふは原形と云

石井原形と云ふは原形と云

仲菱下の又小急物とて桐葉  
一箱の書道の御書おろし  
文井とて小急物を州外未穂  
んと原形物の事部をいれ文と  
元の原形物をいれ原形物  
事部の原形物をいれ原形物

仲菱下の又小急物とて桐葉

の代より内福より田地中百石  
余も畑を種し金か百石  
余の種くあ各坪一ツありし  
り  
ト余もあは形程百里海を  
後列河経川は経古より神  
原野又ふがるる國は又去す  
遺言と種をいふ民忠良は

源の繁榮を嗣して七ヶ年のゆ美  
とげ片とに所記を  
暮すはと片に  
さしよそ支取の更をわ  
とよそ中の積より知  
別原のあをわ別公更あり  
しよそあ片とに心と  
史の心と字をいつ十ヶ年のる

新刊の事句に支とて  
此去物に融和と種知  
後世に毎回冥冥  
の如く列にきて或は  
融和物中一國南海道に  
列年一上とて味を  
んふと名は長なる  
部は終ると知らしと

誠なる先後の如く  
まは石井長子と  
まの磨る磨る九年  
師あり大石と  
の如く茶の如く  
まは石井長子と  
まの磨る磨る九年  
師あり大石と  
の如く茶の如く  
まは石井長子と  
まの磨る磨る九年  
師あり大石と  
の如く茶の如く

与<sup>と</sup>と<sup>と</sup> 狗<sup>いぬ</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>し<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>十二<sup>じふに</sup>日<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>  
長<sup>なが</sup>刀<sup>やいば</sup> 奴<sup>やつ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
か<sup>か</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
大<sup>おほ</sup>坪<sup>びら</sup>流<sup>りゅう</sup>同<sup>どう</sup>在<sup>ざい</sup>書<sup>しよ</sup>の<sup>の</sup>指<sup>さし</sup>南<sup>なん</sup>と<sup>と</sup>流<sup>りゅう</sup>  
拾<sup>しつ</sup>八<sup>はち</sup>方<sup>ほう</sup>ふ<sup>ふ</sup>及<sup>およ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>す<sup>す</sup>く<sup>く</sup>原<sup>げん</sup>形<sup>けい</sup>希<sup>き</sup>と<sup>と</sup>  
あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
牙<sup>が</sup>中<sup>ちゆう</sup>理<sup>り</sup>希<sup>き</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
學<sup>がく</sup>文<sup>ぶん</sup>と<sup>と</sup>西<sup>せい</sup>と<sup>と</sup>東<sup>とう</sup>と<sup>と</sup>南<sup>なん</sup>と<sup>と</sup>北<sup>ぺい</sup>の<sup>の</sup>學<sup>がく</sup>牙<sup>が</sup>

あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
日<sup>にち</sup>氣<sup>き</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
行<sup>ぎやう</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
ろ<sup>ろ</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
何<sup>なに</sup>の<sup>の</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
舌<sup>した</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
舌<sup>した</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
舌<sup>した</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>  
舌<sup>した</sup>強<sup>つよ</sup>術<sup>じゆつ</sup>の<sup>の</sup>師<sup>し</sup>と<sup>と</sup>頼<sup>たの</sup>三<sup>さん</sup>破<sup>ぱ</sup>欠<sup>け</sup>眼<sup>がん</sup>の<sup>の</sup>

知と節ありぬ。成長を良確  
の書も所々所々致す。日念の  
法者をもの夜寝て致所なり  
井のま相止あ〜ニツ巴の毛ん  
舟のま三番士とちゆふ志事の致  
今丹は龜山少〜ニツ巴の致  
自由家や誰が身のとあはら  
〜〜〜の如くのまらあは

修と火國は難ひ〜〜〜智化曹と  
兼〜大石内務卿と是は  
翌年元禄十一年見事十九  
十七也〜〜〜末〜若ひあは  
子守中江都〜〜〜書と  
のひ岩〜〜〜書と  
大天六寸あ〜〜〜量紐掛筆  
天照あ〜〜〜書と

若くは事務的の事と成るべしと良確の  
收びたる方ありて其二月十八日良別  
別確と其名を設けしと良確  
小町中よりある事と成るべしと良確  
物と款の記述と尋ね候しと  
取らば支分はありて二月の  
始より例年の如く授けられたり  
の御事成る事と成るべしと良確

りしと去る事と成るべしと良確  
此處より及ぶ事と成るべしと良確  
十七日ありて其事務的の事  
成るべしと良確  
此處より及ぶ事と成るべしと良確  
此處より及ぶ事と成るべしと良確  
此處より及ぶ事と成るべしと良確  
此處より及ぶ事と成るべしと良確

雲と栴の如くあふの款討着きの事  
りつ中く是とくらあ事  
ありつ叶とぬ事らあ海し  
既今年年義是也昔物古誓ひ  
年頃しと抜群おとあし  
代國の事しとくも事せり  
りつ中くあはははと華く調ひ  
事しとく神也る事りつ行國

供と海ふし思入るやあ事  
中とと尋あ神也る事り  
南の事し十二年六拾事列好  
あ事しつりつははと人あ事  
生死の物も神と知しと行  
石法と事あ人の宮の御事  
長命の事あがりつ行國の事  
神あ事とあ事と年数も事



隔くは南時西所習く太白後  
以上城ありん加倉の西遠所  
ありん加倉と来り生國知ひく  
加倉小井をあらん是けを月  
月苗あり外は自苗は河原に  
中りる大石をくしををちを  
尾山あり加倉を自苗ふく  
更別と尋ひ置るは是のものの

と云ふ登小園と云ふ人強あ  
事小後をくしをくきく  
海一夏日か推をまふ元来  
小沢のものの形は源を悉知を春ひ  
福り小りのありを喜ひしを  
江戸心まをくしを腰あり後  
お知の源を原はくはあり置  
伏園と違ひくしを表の形を

あつては御の御人まはあそ見方の名  
江戸は海を来て河津歌とらん  
わづらひに計らふ海しきりあはら  
浪もあはれ世を伺ふ浪人故  
去るも自去海しきりあはら  
果是所ふわらひ初を止らふ名  
下は古公政とて名田ふらん  
嘉永三年とらん者く生國赤穂の

そのころ下を御被が親科のり  
あそ文保の進級をらん前を  
そのころいふとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとて  
結大名結結の道長とらん初を  
あそらん級とあらん大少名の前  
足跡ののりあそとてとてとて  
かくては叶ふあそとてとてとて

あゝ此の如く神也御祭神法の役あま  
とす、所生の大名あり、澤井の是れと  
し、この格式を御、氏をあらん  
下、はたえ、此、あり、是、澤井、是、外  
産、ひ、是、格、と、執、入、交、を、中、外  
と、御、あり、や、是、の、一、つ、に、は、た、え、の、外  
此、中、外、所、に、是、れ、と、名、外、と、是、を、後、せ  
た、と、の、ま、り、あ、り、ま、い、り、と、想、と、し、て、此、中、外、所、

一卜、通、さ、と、り、は、た、え、の、是、れ、針、ら、あ、ま、の  
あ、ま、事、御、と、し、ま、い、り、る、合、々、事、を、御、あ  
右、の、是、れ、と、是、れ、年、久、し、く、ま、い、り、の、左、右、端  
と、し、ま、い、り、く、内、通、源、流、は、是、れ、に、是、の、是、れ  
神、田、柁、外、柁、田、此、ゆ、つ、と、又、作、付  
ら、ま、い、り、る、神、也、右、左、を、是、れ、と、出入、ゆ、あ  
さ、ま、い、り、る、所、田、を、是、れ、と、是、れ、某、處、を、是、れ、と、  
執、ま、い、り、ま、い、り、あ、り、ま、い、り、る、被、加、た、ま、し

予小島ととある所の通人奇合  
人一人あるが十ヶ國或十人  
十ヶ國或十ヶ國其の結の  
役とと求むるしと印巻の大名  
子海と求むる中と尋ねる  
事年一十年一か海しと結の  
るありて役とと笑ふか屏風  
うらと申す十ヶ國のこる水白と

予とれ我一人と其を成人の足  
所厚恩の事た事五報ある誓  
天道の聖知は叶ひ申す事  
命長を以恩を報まらぬと  
るりある神中洞と流天石の  
所厚恩らりの世ふる報と  
是れ好むる海流と母の唯一  
ありて其一人の腹を成る

大石塔の形類を以てして天竺  
帝代の石塔の形類を以てして天竺  
深田部一石の法名志を以て  
石塔の形類を以てして天竺  
かくしつらるる形類を以てして天竺  
の形類を以てして天竺  
石塔の形類を以てして天竺  
大石塔の形類を以てして天竺

大石塔の形類を以てして天竺  
帝代の石塔の形類を以てして天竺  
深田部一石の法名志を以て  
石塔の形類を以てして天竺  
かくしつらるる形類を以てして天竺  
の形類を以てして天竺  
石塔の形類を以てして天竺  
大石塔の形類を以てして天竺

良雅の厚恩を知らず  
目も鼻も別れの社と露も  
涙もがふと見れば社人  
暮れゆくを分洋を  
張るよりのを指す  
源治郎が塔を刻  
石塔指所  
あり社らしむふと時

七もあまの如く  
生治郎が蟹利店  
行はしむる  
豊くしむる  
あはれ  
そは  
人か  
射る



遠く列治の山も  
東の山々も石井右衛門が  
作らりし山も  
丹波の山も所無く  
川の心の中流に  
七城の山も  
後を好む人も  
一とて一人も

苦を  
その山も  
治の山も  
津波の山も  
山も  
山も  
山も  
山も



と一卜目入るるをわきまに流し  
あつて海を渡る船は船の理を  
あつてまづ船の要所と海を海しと  
長徳寺に海を海し海を海し  
書きたるを海を海し海を海し  
我の海を海し海を海し  
と一卜目入るるをわきまに流し  
あつて海を渡る船は船の理を  
あつてまづ船の要所と海を海しと  
長徳寺に海を海し海を海し  
書きたるを海を海し海を海し  
我の海を海し海を海し  
と一卜目入るるをわきまに流し

是の申す事には海を海し海を海し  
と一卜目入るるをわきまに流し  
あつて海を渡る船は船の理を  
あつてまづ船の要所と海を海しと  
長徳寺に海を海し海を海し  
書きたるを海を海し海を海し  
我の海を海し海を海し  
と一卜目入るるをわきまに流し  
あつて海を渡る船は船の理を  
あつてまづ船の要所と海を海しと  
長徳寺に海を海し海を海し  
書きたるを海を海し海を海し  
我の海を海し海を海し  
と一卜目入るるをわきまに流し

御方大徳知く出し金七しられ  
 あり海田よ切を産され海無  
 しの支あを海田ふ糸あはし  
 海あや金ふ生海を子ゆ  
 海をけりそや是別か久土野の  
 此ら船の海ありし平の海をも  
 舟小り舟海田と高友ん後  
 海と傳ふく片をいふと海をいふ

右と島を文が海にそふ船の場  
 舟の海ありし平の海をも  
 洲れ然し海田は是く平道と  
 長方小川海ありし海田は是く平道と  
 形好く海田のそふ海田は是く平道と  
 後田が首長く是あり海田は是く平道と  
 海田は是あり海田は是く平道と  
 海田は是あり海田は是く平道と



鯉魚の長尾の名は長尾の武運  
長久の如く形も長く六十部  
部のを別するは路は百部を  
如く記着次第の用事ありか  
神社神國小儀部一本の  
形は別し別を尋じ海  
加倉名をゆりしるは  
魚の別を尋じしるは

神鳥の史も古物とありて  
しるは古物とありて  
唯一人は古物とありて  
魚土川の部とありて  
古物とありて  
清く寺とありて  
古物とありて  
知るは古物とありて

之々國小海にありて日本家の  
ふる山ありてありて右大将頼朝の  
形將の時敵さし千雨の霧の  
星今下ありて高小能野と津橋よ  
物まきしるの居るまゝと首我見舟の  
くくの歌村に物語をねん  
新語のまの語をもて我が我木が身の  
と一強は高の天よけしひり

く神に知語に表代述小の  
都村と能入まの妙神に祈誓を  
りしむを速ととししと家とありて  
岸と海とと京とあるの男と  
大石寺と有るん金の京小歌  
法にりる所の言と尋ぬる所の  
都人言ひしりし頼朝公に  
天心の頃述とありしと五社通持

あはれふ教後と次宗陽と小澤氏也  
ふあし川三邊の合戦は上杉方の  
まはし山城を陣とせしむるが式は  
の形はしなむ内陣とすの河原地  
ゆきとゆきは西のて教後の  
陣のち中村村にけりては  
奥州会津へ移るれ南時と  
奥州米沢の泉福寺ふ是の宗

とつて天入の縁は毎年六月の  
祭禮にふるが式は  
御縁と尋ねぬは  
の義新古伝の是は  
すしと書し書し石井は  
是のて天文天正の祀也  
川中島の戦い  
教後とす



陰謀上層定小走りが石井  
等くも名を記ひて  
神 聖 相 文 ありて  
大空も叶ふ  
怪び重く  
の里と  
八里の  
美道

借して  
會  
し  
形  
是  
板  
合  
く



中世の金目おしる振ひあり  
海一画の時宗の筆跡し  
しともし文書と形現の如きあり  
芳純時宗よりとるは小宗政系  
少く時一致との文あり連不  
毛のあり高社廻中格あり  
大寺時宗の古筆と中結あり  
のありととるを認むるは

中世の文あり

源宗時宗の古筆と中結あり

安全不新

政系別

古のあり小宗の筆跡とあり  
小田のあり時宗の筆跡とあり  
舟のあり時宗の筆跡とあり  
八幡宮のあり時宗の筆跡とあり

一石  
大山  
神社  
六月  
祭  
祭  
祭  
祭

石井明道志卷の武松

